

# ある男と牛の話

小川未明

青空文庫



ある男が、牛に重い荷物を引かせて町へ出かけたのであります。

「きょうの荷は、ちと牛に無理かもしれないが、まあ引けるか、引かせてみよう。」と、男は、心の中で思つたのでした。

牛や馬は、いくらつらいことがあつても、それを口に出して訴えることはできませんでした。そして、だまつて人間からされるままにならなければなりませんでした。

牛は、その荷を重いと思ひました。けれど、いつしようにけんめいに力を出して、重い車を引いたのです。

街道をきしり、きしり、牛は、車を引いて町の方へとゆきました。汗は、たらたらと牛の体から流れたのでした。松並木に

は、せみが、のんきそうに唄をうたっていました。せみには、いまだんな苦しみを牛が味わっているかということを知りませんでした。野原の上を越え、そよそよと吹いてくる涼しい風に、こずえに止まって鳴いているせみは眠気を催すとみえて、その声が高くなったり、低くなったりしていました。

牛は、心のうちで、せめてこの世の中に生まれてくるなら、なぜ自分は、せみに生まれてこなかったらうとうらやみながら、一歩一歩、倦まずに車を引いたのであります。

男は、手綱の先で、ピシリピシリと牛のしりをたたきました。牛は、力をいっぱい出していきますので、もうそのうえ早く足を運ぶことはできませんでした。さすがに、男も、心のうちでは、無

理をさせていると思つたので、そのうえひどいことはできなかつたばかりでなく、またそのかいがなかつたからです。

それに、真夏のことであつて、いつ牛が途の上で倒れまいものでもないと思つたから、よけいに心配もしたのでした。

街道の中ほどに掛け茶屋があつて、そこでは、いつも、うまそうな餛ころもちを造つて、店に並べておきました。男は、酒呑みで、餛ころもちはほしくなかつたが、牛が、たいそうそれを好きだということを聞いていましたから、やがて、その家の前へさしかかると、

「どうか、この荷物<sup>にもつ</sup>を無事に先方<sup>せんぼう</sup>へ届けてくれ。そうすれば帰り<sup>かえ</sup>に餛ころもちを買つてやるぞ。」と、男は、牛にいったのであ

ります。

その言葉が牛にわかつたものか、牛は重そうな足どりを精いっぱいことば うしに早めはやました。そして、その日の午後、町の目的地へ着くことができたのであります。

おとこ

男は、そこで賃金ちんぎんを、いつもよりはよけいにもらいました。

こころ

心のうちでほくほく喜びながら、牛にも水みずをやり、自分も休やすんでから、帰かえりに着ついたのでした。

うし

「牛もたいそうだし、自分も骨ほねだが、多く積つんで積つめないことはないものだ。すこしこうして勉強べんきようをすれば、こんなによけいにお金かねがもらえるじゃないか……。」と、手綱たづなを引ひいて歩あるきながら考えかんがえました。

まちで町を出てから、田舎道にさしかかったところに居酒屋がありました。そこまでくると、男は、牛を前の柳の木につないで、店の中へはいりました。彼は、有り合いの肴でいっぱいだったのであります。そして、いい機嫌になつて、そこから出たのであります。

その間、牛は、居眠りをして、じつと待っていました。牛は疲れていたのです。赤々として、太陽は、西の空へ傾きかけて、雲がもくりもくりと野原の上の空にわいていました。

男は、牛を引いて、やがて館ころもちを売っている店の前へかかりますと、その時分から、ゴロゴロと雷が鳴りはじめました。

「あ、夕立がきそうになつた。ぐずぐずしているとぬれてしま

うから、今日は我慢がまんをしてくれな。明日は、きつと餡あんころもちを買かつてやるから。」と、男は牛おとこにいいました。

牛うしは、黙だまつて、下したを向むいて歩あるいていました。男おとこは、けつしてうそをいうつもりはなかつたのでしよう。すくなくも哀あわれな牛うしには、そう信しんじられたのでした。

あ、ひ おとこ、きょう おな、  
明あくる日も男おとこは、昨日きのうと同じほどおもの重おもい荷にを引ひかせたのです。  
牛うしは、汗あせを滴たらして車くるまを引ひきました。そのうち、餡あんころもちを売うる店みせの前まえへさしかかると、男おとこは、ちよつと店みせの方ほうを横よこ目で見みて、  
「今日きょうは、帰かえりに餡あんころもちを買かつてやるぞ。だから、早はやく歩あるけよ。」といいました。

きのう おな、  
昨日きのうと同じ時じ分に、町まちへ着つきました。そして、男おとこは、  
昨日きのうと同じ時じ分に、町まちへ着つきました。そして、男おとこは、昨日きのうと同じ時じ分に、町まちへ着つきました。



じように、よけいに金をもらいました。男は、ほくほく喜んだのであります。この男は、よけいに金を持つと、なんで忍耐して、居酒屋の前を素通りすることができましよう。やはり我慢がされずに、店へはいつて、たらふく飲みました。その間、牛は外にじつとして待っていました。

男は、いい機嫌で店から出ると、牛を引いてゆきました。やがて、餡ころもちを売る店の前へさしかかりました。

「なに、畜生のことだ。人間のいったことなどがわかるものか……。」と、男は、ずうずうしくも知らぬ顔をして、牛を引いて、その前を通り過ぎてしまいました。そのとき、牛は、  
「モウ、モウー。」と、なきました。

「さ、早く歩け！」と、男は、しかりつけて、ピシリと牛のしりを手綱で力まかせにたたきました。すると、いままで、おとなしかった牛は、急に、猛りたつて、男を角の先にかけてかと思つと、五、六間もかなたの田の中へ、まりを投げ飛ばすように投げ込んでしまつたのです。

彼は、顔を泥田の中になかにうずめてもがきました。そのまに、牛は、ひとりでのこのこと歩いて家へ帰つてゆきました。

男は、ようやく田の中からはい上がる、と、泥まみれになつて村へ帰りましたが、あう人たちがみんな怪しんで、どうしたかと思ひましたけれど、さすがに、牛にうそをいつて、復讐されたとはいえず苦笑いしていました。

彼は、家に帰つてから、黙っている牛が、なんでもよくわかつていることを覺つて、心から自分の悪かつたことを牛に謝したと  
いいます。

——一九二六・六作——



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

※表題は底本では、「ある男《おとこ》と牛《うし》の話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# ある男と牛の話

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>